コラム　人生課長の独り言～一歩進めるためのヒント～

「分からない」を認める誠実さが、夢への伴走支援になる

「正解のない時代」と言われて久しい現代、学校現場ほどその困難さに直面している場所はありません。不登校やいじめ、複雑な家庭背景など、目の前の子どもが抱える課題に対し、即効性のある「解決策」が見当たらないことも多く、悩んでおられる先生も少なくないはずです。

教師として「早く解決してあげたい」「原因を特定しなければ」と思うほど、出口の見えない状況に、先生自身が疲弊してしまうこともあるかもしれません。しかし、本県の「OKAYAMA夢につながる学びプロジェクト」が目指す「誰一人取り残されない教育」において、今、最も必要とされているのは、性急な「答え出し」ではないのかもしれません。

心理学者の河合隼雄先生は、その著書（※）の中であるエピソードを紹介されています。漁船で海釣りに出かけた数人が、夢中になるあまり潮に流され、周囲も暗くなり方向が分からなくなった。慌てふためく船内で、ある人が「灯を消せ」と言ったそうです。言に従い、灯を消したところ辺りは真っ暗闇。しかし、不安の中、しばらく耐えていると目がだんだんなれてきて、遠くに浜の町の明かりをみつけて無事に帰ってきた。というものです。

教師を含めた大人は、子どもが迷わないようにと必死に足下を照らしています。しかし、時にはその灯りを消し、共に暗闇に耐えることで見えてくるものもある。「ネガティブ・ケイパビリティ」は、まさにこのエピソードと同じように感じます。

すぐに結果が出なくても、教師がそばに居続けること、そのことが児童生徒の「夢」を支える確かな土壌になっています。「（教師なのに）答えを出せない自分」を責める必要はありません。その誠実な戸惑いこそが、子どもに寄り添う伴走者の証なのです。（髙橋）

※河合隼雄「灯を消す方がよく見えることがある」　『こころの処方箋』新潮社

人権教育・生徒指導課のホームページもご覧ください。
https://www.pref.okayama.jp/soshiki/350/

Vol.45　発行日　令和8年7月

岡山県教育庁　人権教育・生徒指導課

生徒指導 Leaflet @ OKAYAMA
リーフ

誰一人取り残されない岡山県の教育に向けて

答えの出ない事態に耐える力
ーネガティブ・ケイパビリティの意義ー

日々、変化の激しい時代です。その結果、想定外の出来事も頻発しています、これまでの経験や知識では、「答え」が見つからないことも多い中、最悪の事態を回避するにはどうすればよいか？その参考になる考え方について紹介します。

岡山県教育庁
人権教育・生徒指導課

〒700-8570
岡山県岡山市北区内山下２－４－６
Tel:086-226-7589　Fax:086-224-2134

Q. 想定外の出来事に直面した時の考え方について教えてください。

課題に直面した時どう考えるか？

A.私たちは日頃、問題に直面すると「どう解決するか」「原因は何か」と、即座に答えを求めようとします。これを「ポジティブ・ケイパビリティ（解決する能力）」と呼ぶならば、その対極にあるのがネガティブ・ケイパビリティ（negative capability ）です。

定義：「どうすればよいか分からない」という不確実な状況や、割り切れない事態の中に、性急に理由や事実を求めず、宙ぶらりんの状態のまま耐えうる能力のことです。

起源：イギリスの詩人ジョン・キーツ（1795～1821）が提唱した概念であり、現代では精神医学や教育の現場で、その重要性が再認識されています。

なぜ、今、ネガティブ・ケイパビリティなのか？

不透明さが増す社会で、ますます重要に

困難な状況におかれている児童生徒を「何とかしてやりたい」という気持ちはとても大切で、解決策を全力で探す努力はこれからも継続しなければなりません。

ところが、現代の学校現場では、不登校や友人関係の悩みなど、すぐには原因が特定できず、解決策も見当たらない状況が多々あり、家庭や保護者の価値観の多様化に伴い、同様の事案でも違う対応が求められる場面も少なくありません。この正解のない中行う対応の不確実性が困難課題対応的生徒指導で教師が疲弊する最大の要因である気がします。

このように考えると、ネガティブ・ケイパビリティは支援する側の教師にこそ求められる力だと言えます。このネガティブ・ケイパビリティに基づく教師の支援による効果としては、次のようなものが考えられます。

○「急がない支援」の効能

判断を保留し、結論を急がずに様子を観察し続けることで、結果的に「この先生は分かってくれようとしている」という安心感に繋がります。教師の安心感は、児童生徒の安心感につながる。

○「児童生徒の自己回復力」に期待

児童生徒の自己決定や自己回復力に期待するので、達成時の自己肯定感につながりやすい。

○「教師自身のレジリエンス」も高める

答えが出ないことへの不安を教師自身が抱え持つことで、焦らず児童生徒と向き合い続け、不確実な状況への耐性が身に付く。

『提要』のダウンロードはコチラ

「急ぐ支援」と「急がない支援」のバランス

場面によって、使い分ける

ネガティブ・ケイパビリティに基づく「急がない支援」が必要な時代であることは間違いありませんが、もう一方のポジティブ・ケイパビリティに基づく「急ぐ支援」が不要だということではありません。

性急に解決を求めすぎる姿勢は、良かれと思って行ったとしても児童生徒を追い詰める結果になる可能性がありますから、改める必要があるでしょう。一方で、「見守る」と言いながら、すべてを児童生徒に委ね（放任）、見放すことも絶対にしてはいけません。どちらが欠けても支援は進まないのです。「急ぐ支援」と「急がない支援」の調和（バランス）が重要だと言えます。

ただ、仕事の性質上、教師は「待つことがあまり得意ではない」という自覚と、ネガティブ・ケイパビリティに基づく「急がない支援」の効果について常に意識する姿勢は持ちたいものです。

比較項目	ポジティブ・ケイパビリティによる「急ぐ支援」	ネガティブ・ケイパビリティによる「急がない支援」
基本姿勢	問題解決・原因分析モード 「なぜ？」を問い、迅速に解決策（Do）を提示する	共感・状況保持モード 「どうすればよいか分からない」不確実な状況の中に共に留まる
メリット	• 具体的で即効性のある解決が期待できる • 見通しが立ち、教師も子どもも安心できる • 成功体験を積み重ねやすい	• 子どもが「分かってもらえた」という安心感を得る • 子どもの自己回復力が動き出すのを待てる • 信頼関係の基盤が深まる
リスク	• 原因を特定できない場合に、子どもを追い詰める可能性がある • 表面的な解決に留まり、再発するリスクがある • 教師が「解決できない自分」に焦りを感じる	• 「何もしない＝見放す」と誤解される恐れがある • 出口の見えない不安を教師自身が抱え続ける負担が大きい • 具体的な進展がないことへの周囲（保護者等）の理解が得にくい
適した場面	問題が明確で、具体的なスキルや環境調整で解決可能な場合（例：学習の遅れ、具体的なトラブルの仲裁）	原因が不明確で、本人の心が激しく揺れ動いている場合（例：行き渋り、深い喪失感、アイデンティティの悩み）

チームによる補完：一人の教員がどちらの能力も完璧に発揮するのはなかなか困難かも？例えば、「担任はネガティブ・ケイパビリティで寄り添い、SC（スクールカウンセラー）がポジティブ・ケイパビリティで見立てる」といった、「チーム学校」での役割分担も必要

© Norihisa TAKAHASHI · Okayama Prefecture Board of Education 、Human Rights Education and Student Guidance & Counseling Division

POINT

- 「分からない」という誠実さが、子どもの心を開く鍵になる。
- 「急ぐ支援」と「急がない支援」のバランスが重要。